

他国からのソーシャルワークの摂取に関する検討

ークリティカル・ソーシャルワークを通してー

○ 大阪府立大学大学院 西部 麻衣子 (009299)

キーワード：ソーシャルワーク、クリティカル・ソーシャルワーク、養成教育

1. 研究目的

本研究の目的は、いまの日本のソーシャルワークが抱える問題点を、日本において「クリティカル・ソーシャルワーク」が摂取される意図を確認しながら明らかにすることである。

「クリティカル・ソーシャルワーク」とはイギリス、カナダ、オーストラリアの英語圏で1990年代に登場したソーシャルワークである。ソーシャルワークの役割、責任、可能性についてクリティカルな視点から考え直そうとするもので、そのような省察的な思考(critical reflection)はソーシャルワーカーに「権力」や「抑圧」への気づきを促す。これらはソーシャルワーカー自身にも向けられており、ポストモダンの思想が反映されているといえる。尚、ここでいう「クリティカル」は決して悲観的ではなく、むしろ「権力」「抑圧」への気づきを通して、社会的な不平等や不正義の存在を明らかにし、抑圧的状况にある人々とともにそれらに立ち向かうことで、よりよい社会を創造できるという望みが含まれている。つまり、目の前の利用者への対処的な支援を行う伝統的なソーシャルワークの限界が、この社会変革的なソーシャルワークには表れている。このような流れは、2014年に改訂されたソーシャルワークの国際定義の内容と通ずるところがあり、世界的にも従来のソーシャルワークから大きく動き出そうとしていることがわかる。

日本においても、2000年以降に一部の研究者が「クリティカル・ソーシャルワーク」を紹介している。なかには紹介に留まるものもあれば、日本のソーシャルワークの問題を把握し、それらを打破するための視点をクリティカル・ソーシャルワークに求めているものまである。社会福祉士が制定され今年で30年を迎える。このような節目の時期に「ソーシャルワークとはなにか」「ソーシャルワーカーとはだれなのか」を今一度整理し直すことがこの先のソーシャルワークを考えるきっかけになるのではないか。

2. 研究の視点および方法

本研究は文献調査によって行う。研究の視点としては、英語圏で登場したクリティカル・ソーシャルワークがこれまでのソーシャルワークとどのような点で異なり、日本の研究者がどのような意図でそれらを摂取しようとしているのかを確認するところにある。また、クリティカル・ソーシャルワークを扱っていない文献において言及されているソーシャルワークの問題点にも視野を広げ、研究者によるソーシャルワークの捉え方を確認する。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に則って研究を行う。特に本研究は文献調査であるため、「A 引用」の際には十分に注意し、盗作、剽窃、孫引きにならぬよう、自説と他説の区別を徹底する。

4. 研究結果

日本のソーシャルワークにまつわる問題点が国家資格後の養成教育の現状を中心にして展開されていることがわかる。そこで指摘されるのは実践の閉塞感ともいえる状況である。特に国家資格後の動きは、ソーシャルワークのターニングポイントであり、これによって大学における養成教育の内容も変わった。特にミクロ志向によるソーシャルワークに違和感を唱える意見もあれば、学生がソーシャルワーク教育のカリキュラムに則った受講を優先するあまりに歴史的に発展してきた社会福祉そのものの思想、哲学への学びを軽視することになると、大学教育自体の危機感を示している意見もある。大きく日本と英語圏の違いとしては、ライセンス化されたソーシャルワーカーが、その養成教育によって、ソーシャルワーク自体の意味が限定的になってしまったとするのが前者の問題点の中心にあり、後者は専門職化されたソーシャルワーカーがいかにして今日の社会的経済的状况に対応しながら、利用者の利益にかなうような実践が行うことができるのかに焦点が当てられている。

5. 考察

ソーシャルワーカーの国家資格制度が制定されて以降、ソーシャルワークの教育に関して様々に議論が展開されている。英語圏においても議論の段階が違ふといえども、「ソーシャルワーク（ワーカー）とはなにか」という問いが通底している。今回のクリティカル・ソーシャルワークの摂取の動きは、曖昧なソーシャルワークを立て直すことが意図されているように感じる。しかし、これは他国からの無批判な摂取につながる可能性もあり、慎重に行う必要がある。つまり、新しいソーシャルワークの概念を取り入れるというよりも、日本がどのような展開過程でいまのソーシャルワーク教育の体制になっているのかを検討することが重要であり、本研究の課題でもある。特に、日本はアメリカの占領期を経ていることから、そのプロセスが他の国と比較すると特殊であるといえる。当時導入されたケースワークの理念が日本の社会福祉のあり方をどのように変えていったのか、歴史的な振り返りとともにソーシャルワークを振り返ることが日本におけるソーシャルワークの理念を見直す際に必要であると考えられる。